



文書館

レキシ ノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪ 22

「都風流トコトナレぶし」（軸物類80）

戦いノオト⑤

幕末の歌(4) ～トコトナレ節～

【都風流トコトナレぶし】

嘉永6年（1853）、浦賀に入港したペリー率いるアメリカの艦隊は、軍楽隊を同行していました。日本で最初に吹奏楽が鳴り響いたのはこのときで、ペリーらは隊列を組み、軍楽隊の演奏とともに浦賀奉行との会見場所まで行進しました。軍楽隊は、このあとも各地で演奏をしたようです。

幕府や各藩は西洋の軍制を取り入れる上で、「軍楽隊」も一緒に取り入れ、西洋の楽器も入ってきました。

慶応4年（1868）、戊辰戦争が始まると、長州などの倒幕軍（新政府軍）は「宮さん宮さんお馬の前にヒラヒラするのは何じやいな あれは朝敵征伐せよとの錦の御旗じや知らないか トコトナレ、トンヤレナ」で知られる「トコトナレ節（トンヤレ節）」を演奏しながら東上したといわれていますが、疑う向きもあります。いずれにしても、トコトナレ節は日本最初の「軍歌」であり、当時の大流行歌であったと言ってもいいでしょう。作曲は大村益次郎ともいわれるものの確証はありません。作詞は品川弥二郎です。

「トコトナレ、トンヤレナ」は拍子をとるための囃しことばでしたが、「トコトナレ」が「徹底的にやれ」の意味をもつようになったのは、この歌が人口に膾炙したからだという説もあります。

明治2年（1869）には、薩摩藩に日本初の近代的な軍楽隊である「サツマバンド」が生まれました。横浜でイギリス陸軍の指導を受け、主に新政府の公務で外国との式典の際に演奏したようです。

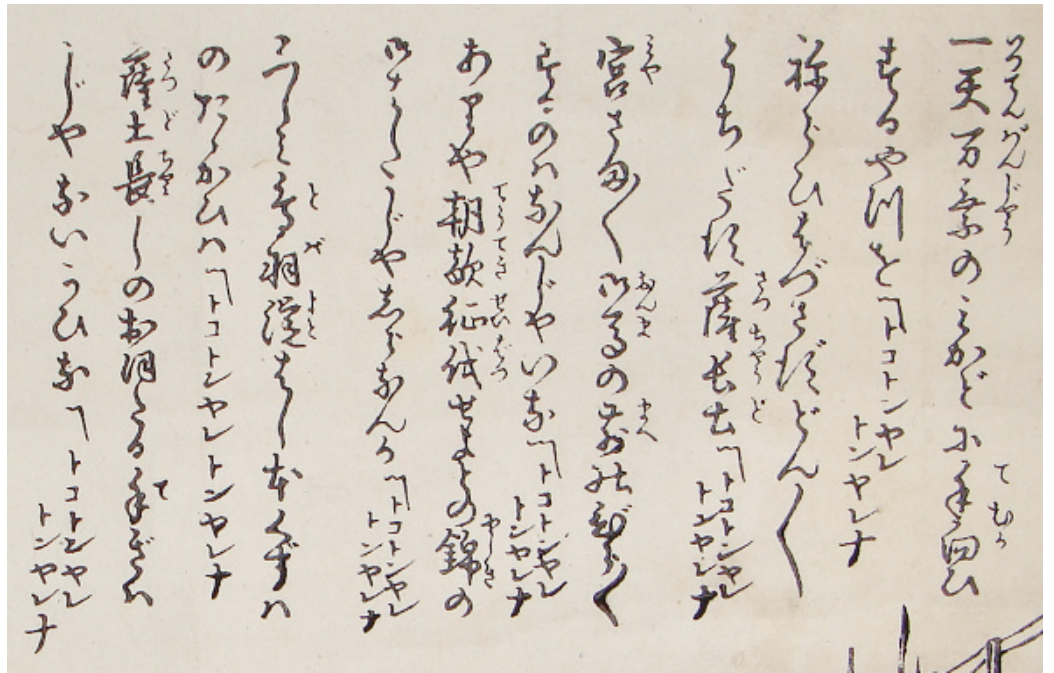
上写真の「都風流トコトナレぶし」は印刷物で、右端に日月の錦の御旗が見えます。岩倉具視は戊辰戦争に先立ち、薩摩の大久保利通と長州の品川弥二郎に錦旗の調製を委嘱していました。「トコトナレぶし」は別名「錦旗節」ともいいます。

「宮さま」は新政府の総裁で東征大総督でもあった有栖川宮熾仁（あすがわのみやたるひと）親王のことです。親王は和子内親王の婚約者でしたが、井伊直弼らの運動で婚約を辞退、和子は将軍徳川家茂に嫁ぎます（和宮降嫁）。この婚約解消は「悲恋の物語」として庶民の間に流布しました。

「尊攘堂遺墨集」
（尊攘堂史料 5）

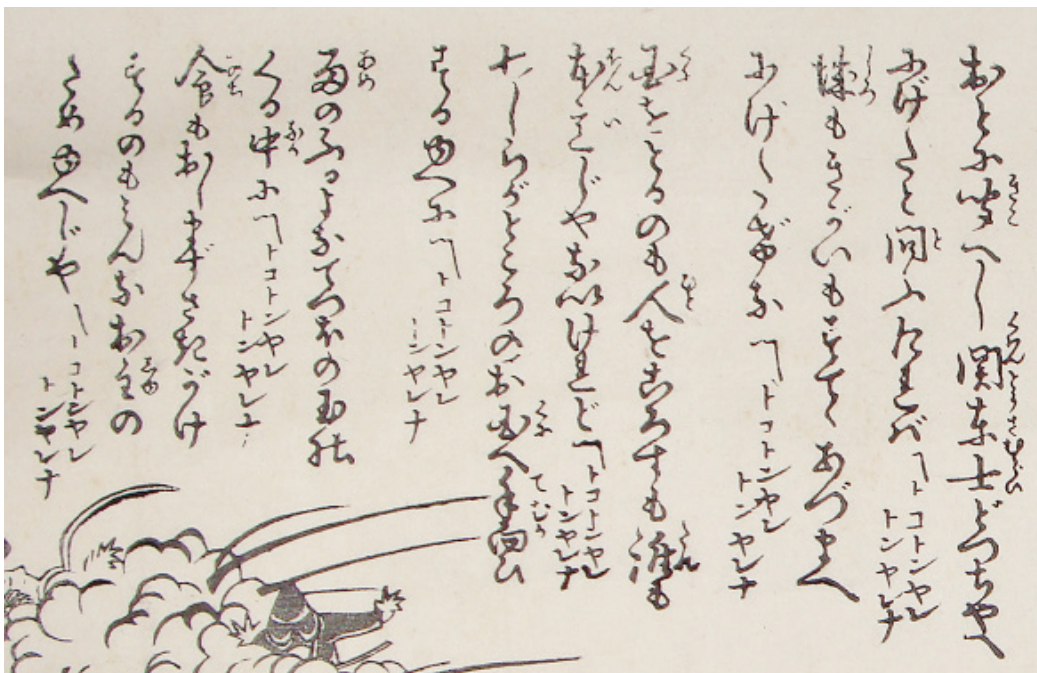
尊攘堂は吉田松陰の遺志を継いで品川弥二郎が明治20年（1887）に京都に建てた施設です。幕末の尊王攘夷運動で倒れた志士を祀り、その肖像や遺墨等が保存されており、京都大学構内に現存します。

写真は当館の「尊攘堂史料」にある「尊攘堂遺墨集」にみえる有栖川宮熾仁親王の書および吉田松陰（右）と品川弥二郎の像。当館には他に、「品川弥二郎日記」（毛利家文庫 71 藩臣日記 36）もあります。



「都風流トコトンヤレぶし」（軸物類80）

- ・一天万乗のミかど（帝）に手向ひするやつを トコトンヤレトンヤレナ
ねらいはつさずどんどんうちだす薩長士 へ（同）
- ・宮さま宮さま御馬の前のびらびらするのはなんじゃいな へ（同）
ありや朝敵征伐せよとの錦の御はた（旗） じゃ知らなか へ（同）
- ・ふしミ（伏見） 鳥羽淀はし本（橋本） くずハ（葛葉） のたゝかひハ へ（同）
薩長し（調子）のお（合） ほたる手ぎハ（手際） じゃないかいな へ（同）



- ・音に聞へし関東士（さむらい）どつちやへにげたと問ふたれば へ（同）
城もきがい（気概）もすてゝあづま（東）へにげたげな へ（同）
- ・国をとるのも人をころすも誰も本意じゃないけれど へ（同）
わしらがところのお国へ手向ひするゆへに へ（同）
- ・雨のふるよなてつほ（鉄砲）の玉のくる中に へ（同）
命もおしまさきかけ（先駆）するのみんなお主のためゆへじゃ へ（同）

トコトンヤレ節は、明治になってもさまざまな替え歌で歌われたようで、次のような日露戦争を歌ったものも残されています。

みなさんみなさん旅順の沖に すらりとならぶはなんじゃいな
あれは「ろしあ」を征服せよとの御国の艦隊とは知らないか トコトンヤレトンヤレナ
皆さん皆さん向うに見ゆるはなんじゃいな
あれは朝日の御旗をひるがえす二百三高地の占領と知らないか トコトンヤレトンヤレナ
「明治38年童話伝説俗謡取調書」（県庁戦前A教育67）